

教区新報

第 3 号

発 行

浄土真宗本願寺派
兵庫教区教務所

〒650
神戸市中央区下山手通8丁目
1番1号 本願寺神戸別院内
電話 (078) 341-5949

こだわりの中で

昨今、私達を取りかこむ状況は、大きなうねりを従え、蛇行し、時には清流となり、そして激流となつて確実に「ある方向」に流れつつある様に思えてならない。

「命を大切に」という呼びかけに異を唱える人はまずいであろうし、「人間の尊厳」が貫かれる社会の実現も大かたの人の願ひであろう。「命」の問題が取りあげられてから久しい。時あたかも教団に於て昨年「世界仏婦大会」が京都で開催され、その成果をふまえて、「命の尊さ」を

みしめ、平和の歩みを強く、たくましく」と、声高らかに確認された。兵庫教区に於ても、今年度の寺婦・仏婦・仏壯の各ブロック研修も「命」の統一テーマで実施された。

しかし現実には、生命を軽視し、人間の尊厳をおびやかす事実が、ますます



近畿同朋運動推進協議会第22回総会
S. 62. 8. 27. 63チサンホテル

り」の中で、互いに敬い、助け合つて生きてゆきたいと思う。

他の命を奪い、自らの欲望の充足の為に、操作支配をしていくことが、複雑化、巧妙化してそれ等が日常化していくなかで、「人間に生れた尊さ」と「如来の大悲の中にある存在」としての「こだわり」を持ち続けた

「私」永遠のこだわりの営みである。 企画推進室 谷川 弘顕

御同朋の社会をめぐって

出稿 堀正福寺 嶋 一 郎

③

「御院さんほんまですかいな、阿弥陀さんが部差差別無くそうと願うてはるちゅうのは。」

「ほんまや。ほんまやけどな。部差差別ちゅうもんは、これ、人間が作り出したもんや。問題はその人間や。部差差別だけやない、ありとあらゆる差別をつくり出して生きていくとする人間、そして差別される方は勿論、差別しているものも決して幸福ではないそんな人間を救つて生命あるもの皆ほんどの幸せの身にしてやりたい、それが仏さんの願ひやで。」

「へえ、なんでそんな願ひおこさしたんやろ。」
「なんやて？」
「いやな、なんでそんな大層なこと思ひ付きなされたかと思ひましてな。なんででつしやろ。」
「なんやて言われても、ほんと、あなたと話してるとかなわんな……」
「あんな、あんな今も病院行つてはるか？」
「病院？なんの話しです。行くことは行つてますが。」
「どこが悪いんや？」
「どこって、御院さん知つてのとおり心臓ですがな。」
「ああ、そうやったな。他は？」
「へえ、まあ他はおかげさんで。」
「彼は達者で心臓だけか、そんならあなた自分でわざわざ病院まで行かんぞ心臓だけ行かしておけばええのに。」
「あほなことを、そんなことできますかいな。」
「どうして、心臓と私は一つでんがな。」
「そうや一つや、だからな、心臓が病氣なら私全体が病氣なんや。心臓だけ外してこれは別というわけにはいかんや。阿弥陀様と私もそれと同じやと仏さまは言うてはるんや。人間が差別しあい、傷つけあつて不幸の中に自分自身を落とし込んでいく、そんな姿を仏さまはわが苦しめ、わが悲しみとして願ひをお建てなされたんやで。」

「へえ。」
「私らはな、いつだって我じゃ他人じゃ、彼じゃ此じゃという生きかたばかりしてるのよ。これ分別ちゅうてな、人間の持ち前、我他我他いうてガタがきて、人間、要するに狂つてくるちゅうこつちや。部差差別といつても我に關係なければ他人事よ。阿弥陀様は他人事ではすまされんお方なの。」

「へえ、でもそんな願ひどこに建てていやはりますんか。」
「どこって、あなたも聞いてるでしようが、阿弥陀様の四十八願、あの願どれをいたたいてもみんなそうやで。」
「ほう……」

「三悪道ならしめん、願の第一や。地獄、餓鬼、畜生どれも我が身を抱え込んで他を蹴落としていく姿や。人間同志が貴いだの賤しいだのと差別しあう姿、これ三悪道や、三悪道を離れて人間に生まれたことを喜べちやう文があるが、なんの三悪道から同じようにはい出して来てまた三悪道へ後ずさりしていく姿やないか。」

「えらい権威でんや。」
「そういうわけやないけどな。だから皆悉金色の願や、みんな金色やで。悉くとおつしやる。家柄が良いの、血統が良いのなんて色付けはないんや。」
「ふうん。」
「そういう阿弥陀様の願が力になつて働いていてくださる姿が南無阿弥陀仏の名号や。」
「そんなら、ナンマンダ言うたら差別無くなりますんか。」
「それやつたらナンマンダは呪文やないか、お念仏は呪文やないで。」
「弥えてもあきまへんか。」
「あくとか、あかとかの問題やないやろ。差別を作り出しているのは人間やで。人間の問題は人間が解決していくのが当然やろ。私にかけられていくる仏さまの願、お念仏になつて働いていくる力、それを思いそれに支えられてこんな差別がなくなるよう努めさせてもらはんやないか。」
「やつぱり人間がやらにやあきまへんか。」
「なに言うてるんや、そなたに、あなた人間の作り出したものを仏さんに尻ぬぐいしてもらはんやないか。」
「そんなつもりはありまへんけど、ちよつと言うてみただけですがな、しかしそうなるかなんぞな、こりややつぱり結婚問題ですな。」
「なんやて、何言いだすんや。」
「そうでつせ。同和地区だ、そうでない、なんて言わずにお互いごんごん結婚していくそれが解決の道やと思ひますな。」
「あなた、自分の言うてることわかつてるんか。それが差別やで。」

門徒推進員コーナー

廻り道ばかりしていた私に気付いたのが、今年の七月初めでした。と言うのも、昭和五十四年四月から二ヶ年の連研を終了、そして五十六年七月五日に本願寺会館大ホールに於いて、兵庫教区第二回連研修了者大会が開催され、奇しくも大会のパネルディスカッションにパネラーとして、連研を受講して「のテーマで発表することとなりました。この機会を与えられたらこそ本大会に参加する事が出来、また当日沢山の資料の中に私に誘いの門徒推進員中央教修受講要項でした。早速、受講願を提出、（十一月二十一日より二十四日）を受講しました。しかし、翌五十七年一月本山より門徒推進員登録証を拝受したが、五年余り成す事なく過しました。過去に、二・三回は頂いたかと思う教区門徒推進員集いの案内も、自分の都合で一回は仏活動参加の為欠席ばかりで、今回初めて六月二十八日開催の集いにご縁あって参加しました。本当に有意義な研修でした。中でも分科会の活動発表で、門徒推進員の立場が認められない、何をすればよいのか？何もする事が無い、等々不満の声が多く聞かれました。（私もそのうちの一人であつたかも）しかし積極的の掲示伝導を繰り返して行っている、見舞伝導をしている、住職のお手伝いをして、不満の声が大きかったので、積極的活動発表ががさずんでいた様に思いました。私に何も出来ないのではなく、やる気を持ち合せていなかったのではないかと、遅まきながら気付きました。専光寺（私の寺）に五人の門徒推進員がいるのだから、一堂に会して話し合うだけでも、初期の目的は達成出来るのではないかと思ひ、ご住職に御指導を仰ぎました。我が寺だけの集い（私の最初の思い）の予定が、姉妹組内の寛正寺に三人の門徒推進員の方が居られるから、組として取り組んではどうの御提案により、七月十七日専光寺にて組の初回、門徒推進員の集いを開催しました。専光寺住職の司会で発会式。長岡組長様より励ましの辞を

頂き、話し合いの中で、寛正寺の増田様より伝導、法座活動に日夜はげんごすること等、また、専光寺門徒の上田さんは、寺の行事の案内状の作成、身近な方への寺への誘い、寺の行事の準備のお手伝い等、単純な事からと話し合いました。早速、組相談員である専光寺ご住職より活動発表の要請があり、翌十八日、組の連研（会所は本覚寺）で連研受講者を囲んで中央教修受講の経験談、受講の誘い等話し合いました。連研受講者の方々も熱心にメモを取り、質問もされている姿を見て感動させられました。教区での門徒推進員の集いが、私を力付け、役に立っている事の喜びを与えてくれました。気付かず其のまま過ぎていた私に、連研、中央教修、各種研修にとみ教を頂く身にかけていただいたのは、何を置いても私の寺のご住職のお導きのお陰様です。思えば昭和五十四年の元旦、会法要の日に連研受講のお誘いがあったればこそ。御仏のお慈悲にめぐめさせていただき、廻り道をしたれど気付かせて頂いた事の喜びを励みにして、お役に立せて頂く覚悟です。

もう、五年間にもなりますので、そろそろ読んでくれる人もあるようで、有難いことだと思つてきます。勿論、ミスもあり言葉足らずの箇所もありますが、最初から完璧を期することは無理なことで、少しずついいものにしてほしいのだと願っています。この発行のためには、ある程度の組内活動もなければならぬこと、でないと思つた新聞にならないと思つています。そして、今一つは編集技術を身につける必要があると思つています。文書による教化活動と言うことは大事なこと、各寺院において新聞が発行されるようになるのが最終目標だと考えています。それから、仏子や仏婦ほどこの組でもやっていますと思つています。これははぶきます。赤穂南組では、名寺の後継者職の集いとして、見真会と言うのがあります。若い人なりの見方、考え方もあります。将来の教化活動のありようなど話し合つたり、講師を招いての学習も持つて頂いています。

組の活動

赤穂南組においては、先ずまず組活動らしきものが出来るように欲目で見ています。他組のことが、よくわからないままに、そんなことを思うのは、井の蛙と全く同じことになっていくのかもしれない。「何をしているのですか」と言われるままに、していることを報告し、参考になることでもあれば参考にしていただいたら幸いです。

先日、十一号を発行しましたが、四ページの組内時報(新聞)が続いています。これは、年に二回ですが、三干部を作つて組内に配布し、法話や連研のこと、或いは浄土真宗門徒としての心得等を掲載しています。今のところ、編集員は五人で、夫々分担してその取材や編集に当たっています。

今度で四年目になりますが、組のサマースクールも彼等が担当しています。一方、彼ら後任の母親(坊主)も負けじと、これは年に二度の坊主研修会を積みんでいます。総代研は年二回、会所回り持ちで開いていますが、連研について多分、他組ではしていないと思つていますが、連研世話人と言つて、各寺から連研終了者(代表)一名を選出して、連研が開かれる以前に、連研の役割分担や、テーマについても予習をする会を持つています。連研と言っても人数も多く、二年間で十二回の研修ではなかなか得る物は期待できないと思つていますので、精銳主義と言ふ少数で話を煮つめていく研修をとつていきます。でもこれは、連研今期の試みで、今のところ、まだその成果はまとめられませんが。

免に角、動いておれば、その動きの中にまた新しい動きが出てくるものです。動き出すことが教化の出発点だと思います。

赤穂南組組長 楠 万千雄

伝道

先手の法

最近読ませて頂いた本に、芳子ちゃんの話が、紹介されてました。その子は、小学校に通うとても元気の良い子供です。芳子ちゃんの家には、屋根より高い大きな柿の木があり、秋にもなると、黄色く輝いた柿が見事なものでした。柿も食べ頃になると、芳子ちゃんは、毎日のおやつにいつも「木に掛けては取っていました。ところが、一番大きくておいしそうな柿だけは、おばあちゃんに残してあげよう。あの柿が熟して、菌の悪いおばあちゃんでも食べられるようになったら、取ってあげようと思つていると、ある日、学校から帰ると、丁度いい具合に熟しています。梯子を木にかけ、竹竿でその柿を取ろうとするけれど、取れません。今度は、木の枝に登って取るうとして、心配そうを顔をしたおばあちゃんが、自分の方を見上げて立って、取ってくれる姿が見えた。

芳子ちゃん、おばあちゃんの話を一息懸命思つてあげるつもりが、いつの間にか、おばあちゃんの方から思われてました。と言うのでした。

芳子ちゃんの話の本で読んで内、歎息の「仏かたてしるしめして、煩悩具足の凡夫と仰せられたる事なれば、他力の悲願は、此くの如きの我がためなりけり」と知られて、いよいよたのもしくおばあちゃんというお言葉が、思い出されてきました。煩悩具足の凡夫とは、ずっと昔から仏様に見られていた自分であり、そんな者を必ず救うと仕上げられた慈悲深いご本願は、私が求める以前から私に向けられた先手のお救いなのです。妙人お経さんは、弥陀のお慈悲を聞いてみりや、聞くより先のお助けや、聞くに用事はさらさない、用事なければ聞かばかり、と歌われていますが、自分に与えられた法を生涯かけて聞きぬかれた方の慶びの歌と深く味わわれます。

加古川組 普光寺
近藤 龍樹
(モダン寺テレホン法話より)

テレホン法話ガイド

- モダン寺テレホン法話 (本願寺神戸別院) ☎078-361-0091
- 勝林寺テレホン法話 (出石組勝林寺) ☎079652-5800
- 網干組テレホン法話 (網干組長事務所) ☎0792-74-0874
- 浄専寺浄土真宗テレホン法話 (赤穂南組浄専寺) ☎07914-2-1544
- テレホン法話正願寺 (加古川組正願寺) ☎0794-37-4133
- 浄光寺ダイヤル法話 (神崎組浄光寺) ☎0790-32-2260
- 法親寺テレホン法話 (岡山南組法親寺) ☎0863-32-0040
- ふれあいテレホン法話兼誓寺 (阪神西組兼誓寺) ☎0798-48-1212
- 浄土真宗テレホン法話 (淡路組長事務所) ☎0799-23-1313
- 武庫川モシモシゼミナール (テレホン法話・みほとけとともに) (阪神西組円徳寺) ☎06-416-1212
- テレホン法話(仏典物語) (城崎組明元寺) ☎07962-3-6393
- 正光寺テレホン法話 (北摂組正光寺) ☎078-982-2000